

パウロは当初、キリスト教を迫害する側の人でした。しかし劇的な回心を経験し、一転して自分が迫害していたキリスト教徒になりました。昨日まで自分たちの命さえ脅かしていた人物が、突然あなたたちの仲間に加えて欲しいと申し出た時の、キリスト教会の人々の驚き様と警戒心は察するに余り有ります。しかし教会はこのパウロをゆるし、受け入れ、使徒の一人であると認めました。パウロが自分は「憐れみを受け」と感じたのは、単なる個人の心象風景に留まるものではなく、キリストを信じる人々が実際にパウロをゆるし、パウロを受け入れた事実も含めてのことなのです。従って「キリスト・イエスは、罪人を救うために世に来られた」というのもただ個人の信仰告白に留まるものではなく、教会共同体が実行する行動そのものであると言えます。教会が実際に人をゆるし、人を受け入れるのを見て、人々はそこにキリストの救いを垣間見るのです。それが事実として行われているのを見れば、長々と教理を説明する必要はありません。キリストの十字架と復活を自分の救いであると信じるのは、そのまま受け入れるに値するものになるのです。

そもそもキリスト教信仰とは、パウロを含むペトロやトマスといった使徒たちの信仰のことです。イエスはこの地上で自ら旅をされながら福音を説かれました。使徒たちは一緒に旅をしていつも福音のみことばを聴いていたのですが、その真意をなかなか悟ることができないままでした。それでもイエスは使徒たちを見捨てず、旅路を共にされました。使徒たちへのイエスの愛に、十字架と復活のキリストを目の当たりにする日まで待ち続けられたイエスの忍耐強さを見出すことができます。愛とは強制や圧力ではなく、先回りして正解を押し付けることでもなく、ただひたすら無限の忍耐であるというひとつの真理がここに示されています。人間が神の真理から目を背けたり逆らったり、さらには悪を行うことさえ許されているように思われるのは、神が沈黙しているからでもなければ弱腰だからでもありません。全能の神がその全能ゆえに、人間にはできない至高の忍耐強さを実行されているからなのです。無限に忍耐強い神は無限に憐れみ深いお方です。この無限の憐れみを私たちに惜しみなく注がれる「永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように、アーメン」。